

保育実践力の育成・向上に関する研究

— 5歳児の鉄棒の場面での指導・援助 —

杉江 栄子* 鈴木 文代** 村岡 眞澄***

研究目的

筆者らは保育実践力の育成・向上を目的とした研究を行っている¹⁾。野田らは²⁾、「遊びは技能指導も必要であるが、遊びとかかわる目の前の子どもの心に寄り添い、自ら挑戦しようとする意欲を育てることが大切である」として、遊びを十分楽しむ経験を支える保育者の環境構成と援助によって、遊びながら運動技能が身につくことを示している。また鈴木らは³⁾⁴⁾、保育の質の向上や保育実践力の育成・向上に関する研究の中で、子どもへの言葉かけの重要性を示し、指示や否定の言葉が先行しないように保育者が子どもに寄り添う言葉かけを意識し、子どもとじっくり付き合いかかわることの大切さを指摘している。今回は技能獲得への挑戦という運動場面での保育者の援助に焦点を当て、保育実践力の育成・向上という課題について追究したい。

今日、子どもの身体発達の歪みや運動能力の低下が危惧されている。子どもたちの学力の二極化が叫ばれているが、子どもたちの遊び場が地域から失われたため体を使う機会が減ってしまい、学習面のみならず運動面についても二極化が進んでいる。家庭や地域での遊びの経験が不足しているために、体づくりがごく自然に当たり前に行われなくなっていることから、園や家庭で意識的に体づくりに取り組んだ場合と、意識しない場合とでは、子どもの運動面での発達の差が大きくなっている。こうした問題は日本だけではなく、欧米諸国においても共通してみられ、北欧やドイツなどでの森の幼稚園などの自然保育園の増加の背景の一端となっていることは周知の通りである。⁵⁾⁶⁾⁷⁾ こうした問題はかなり前から指摘されており、いろいろな観点から研究が進められている。日中を過ごす幼稚園・保育園の役割として、保育者がどの幼児も進んで運動をする環境を整え、十分運動遊びを経験できるように適切な援助をすることが重要であると考えられる。

柳田 (2008)⁸⁾ は、幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究の中で、幼児の運動指導は運動遊びを基本として行われており、「幼稚園教師は、幼児の自発的運動欲求を重視し、必ずしも運動の発育・発達段階やステージを考慮した指導を行っていない傾向が示された」ことを明らかにし、指導理念の変容が、子どもの体力低下抑制の一要因となる可能性を示唆している。このような中で、実際に保育の現場では、課題解決のために保育者主導の一斉的な技能指導や外部の指導員に依拠した体操教室的な対応が行われたり、逆に技能面での指導に躊躇して単に見守りや見回りに終始してしまったりなど、幼児の体の育ちへの働きかけ、とりわけ運動指導については迷いがみられる現状がある。しかしながら、保育は遊びながら学ぶという幼児期独特の育ちを考慮して行われるものであり、教科としての体育とは指導の仕方が異なることはいままでもない。幼児が自ら進んで体を動かし楽しむことを通して心情・意欲・態度を育てるということの中に技能獲得への働きかけも位置づけられる。⁹⁾、したがって、「保育者は運動の発育・発達段階やステージを考慮した指導を理念としてもち合わせる大切」という柳田の提起に加えて、自発的な遊びにつなげる環境構成と子どもの内面を

* 高浜幼稚園 ** 岡崎女子短期大学 *** 名古屋学芸大学

理解し、その場の状況に合わせた適切な言葉かけや対応ができる実践力を身につけ一層向上させることが大切となる。

運動遊びでは、単に身体面の育ちだけではなく、友達とのかかわりや集中力、判断能力、規範意識の育成などいわゆる総合的な育ちが促される。¹⁰⁾したがって、運動遊びの機会が減るということは、身体面の発達だけでなく幼児の様々な育ちが抑えられることになり、そういう意味でもこうした課題の解決は重要である。

そこで、本研究では、5歳児に挑戦意欲をかき立て、「空間意識」の形成や「動くコツ」を体得する機会ともなる鉄棒逆上がりを取り上げてその指導・援助について追究したい。鉄棒は脊柱の生理的湾曲がほぼ決定する幼児期に、ぶらさがることの楽しさを味わうことができる遊びである。逆上がりのように、できる、できないなど結果が出るものは、繰り返しの挑戦やコツの習得、努力や根気も必要となる。つまり身近でありながら遊びに難しさを含めることもでき、達成すれば充実感や達成感が得られることから5歳児にとって魅力のある遊びとなっている。このような鉄棒逆上がりについてその指導・援助について検討し、結果について認識の共有化を図ることにより、保育実践力の育成・向上につなげたい。

研究方法

保育者への質問紙調査

1. 対象：愛知県内保育園幼稚園の保育者258名

対象者の属性：対象者の所属園および属性は表1～4に示した通りである。

表1

		園数	対象人数
保育園	公立	12	210
	私立	1	9
幼稚園	公立	1	16
	私立	2	23
計		16	258

表2

雇用形態	人数	%
正規雇用	131	50.8
臨時（フルタイム）	28	10.9
臨時（パートタイム）	95	36.8
その他	4	1.5
全体	258	100.0

表3

保育経験	人数	%
1～3年	50	19.5
3.1～6年	39	15.2
6.1～10年	64	24.8
10.1～15年	50	19.5
15.1～20年	25	9.7
20.1年～	29	11.3
全体	258	100.0

表4

担当年齢	人数	%
0～2歳児	16	6.2
1歳児	9	3.5
2歳児	23	8.9
0～2歳児混合	22	8.5
3歳児	37	14.3
4歳児	33	12.8
5歳児	31	12.0
3～5歳児混合	3	1.2
フリー	49	19.0
その他	35	13.6
全体	258	100.0

2. 実施日：平成22年9月1～7日および平成23年2月

3. 調査内容

調査内容の内、次のような5歳児の運動場面での指導を抽出して回答を得た。

5～6人の子どもが鉄棒で逆上がりをして遊んでいました。その傍らで2人の子どもが鉄棒に何回も挑戦する姿がありました。しかし挑戦しても結果は同じでできませんでした。2人の子どもが他児の様子をみる姿から、鉄棒ができるようになりたい気持ちが伝わってきます。

2人に最初にかける言葉と対応をお答えください。

結果と考察

1. 対応の実態

上記の質問で得られた回答について研究者が合議し、4つの型に分類をした。

<合議内容>

- ・ 5歳児は仲間関係が育つ時期であること、友達の姿に目が向いていることから身近な友達が“逆上がりができる”ということに強い影響を受けていることを前提として捉え、子ども同士の関係性を意図的に援助に取り込むことが必要である。
- ・ 友達に教えてもらうことは、教える友達への信頼が高まり、教える側の主体性と自己肯定感も高まる。互いに育ち合うことで関係性の質が良くなる。友達との気持ちの通じ合いが力になる。
- ・ 逆上がりができることを急ぐのではなく、子どもが繰り返しの中で達成感が得られるようにする。
- ・ 自分で選択した行動は最後までやり通すことにつながるため、自己決定が重要である。
- ・ 子どもが自ら主体的に動き、苦勞してこそ子ども自身が手ごたえを感じ喜びが増す。
- ・ 子どもが自分の変化を感じた時、感情の積み上げができ、さらなる意欲につながる。
- ・ 保育者が子どもの気持ちを受け止めることは重要なかわりであるが、子どもの気持ちはどこに向いているのか、何を求めているのかをしっかりと捉えて援助しなければ、十分な指導とは言えない。
- ・ 保育者からの一方的な技能指導では保育者の自己満足になりかねず、育ちの過程がおろそかになる。
- ・ 運動遊びは子ども同士で楽しむものであるが技能を必要とする遊びについては、技能習得に関する知識や指導技術を身に付け、子どもの状況に応じた適切な補助ができることは必要である。
- ・ 保育者ができる、できないだけに気持ちが向いてしまうと、子どもを優劣でしか見なくなり、その保育者の価値観が子どもたちに波及してしまう。
- ・ 逆上がりは、自ら身体を活発に動かす様々な遊びを通し、結果的に獲得される運動技能である、という理解のもとに援助をすることが必要である。すぐにはできないという見方が必要である。

<4つの分類>

- A：理想型・・・この場面での指導として最もふさわしいと考えるもので、鉄棒逆上がりができるという結果を求めるだけでなく、子どもの気持ちを受け止め、技能習得のプロセスを重視し、技能を仲間同士で伝え合うような関係性の構築を意図した働きかけがあるもの
- B：幼児主体型・・・子どもの意思を確かめ、子どもにどのようにしたらよいのかを考えさせた上で指導するもので理想型に次いで望ましいもの
- C：受容・放任型・・・ただ子どもの気持ちを受け止めるだけで指導がないもの
- D：指示型・・・どのようにしたいのかという子どもの意思を確かめずに保育者が一方的に技能指導をするもの

4つの型の内、AとBを(1)“望ましい対応”とし、CとDを(2)“見直したい対応”と捉えた。以下にそれぞれの型の回答例をあげる。

(1) 望ましい対応の回答例

A：理想型

- ・友達同士のかかわりも大切にしながら、2人の「できるようになりたい」気持ちをくみ、友達に教えてもらい頑張って挑戦し、できる子どもできない子ども励まし合いながら成長していけるようにする。その中で保育士もさりげなく補助をしたり、「もう少しでできそう」などと気持ちを後押しする。
- ・頑張っていることを認め、挑戦する気持ちが折れないように、コツを知らせたり進歩を認める。子ども同士で教え合い励まし合ってできるようにしていく。
- ・挑戦する姿を認め、子どもに合わせたアドバイスをしたり、できる子に教えてもらう機会をつくったりして少しずつでもできた実感できるように支えたい。
- ・子どもが何度も頑張っている姿を認める言葉をまずかける。そして保育士が一人一人の援助のポイントを見つけアドバイスをする。途中5～6人の逆上がりができる子に「どうしたらできるかな？コツはある？」と問いかけ、2人の子ができるようになるため、みんなで応援したり教え合ったりし合えるような環境をつくる。そして友達と保育士と一緒に2人の子を励まし応援することで、できた時には共に喜び合いたい。

B：幼児主体型

- ・やり方を伝えたり、見守って援助したり少しでもできたことは認める。やろうという姿を大切に、「こうするとできるかも」と励ます。
- ・できる子の様子を見て「腕を曲げている」「足が上がっている」などコツを一緒に考え練習する。すぐにできるようになることを望むのではなく、過程を大切にできた喜びが十分に味わえるようにする。
- ・挑戦する気持ちを見守り、手伝ってほしい気持ちを出した時に一緒にやり、その時のやろうとする気持ちを自信につなげる。

(2) 見直したい対応の回答例

C：受容・放任型

- ・何回も頑張ってるね。もうすぐできるようになるから大丈夫だよ。
- ・できるようになりたい気持ちを受け止め、毎日頑張ればできるよと応援する。
- ・挑戦する気持ちがあるときは、そばで見守ったり、声をかけ励ましながらか見守る。

D：指示型

- ・ポイントを教え軽く補助して回る感覚がつかめるようにする。
- ・できなくて諦めるのではなく、失敗することでどうしたらできるようになるか、できないところをアドバイスして一緒にやる。

以上のような4つの型の型別の回答率示したのが図1である。図からもわかるように、理想型は9.8%と少なく、幼児主体型は44.3%とほぼ半数となっている。見守りに終始する受容・放任型は10.2%と少ないが、指示型の35.8%と合わせると46.0%となり、約半数の保育者がただ見守るか、保育者主導になるかのどちらかである。つまり保育者の半数が、見直したい対応になっている。

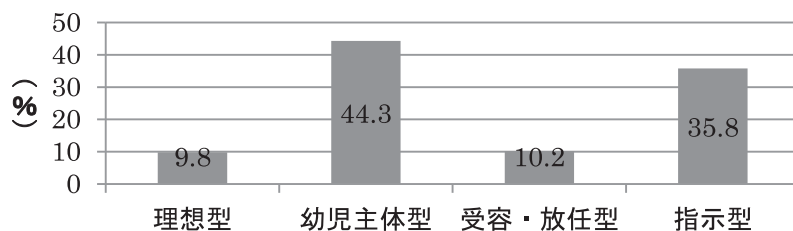


図1 鉄棒場面での対応の型別割合

望ましい対応は、子どもの反応に合わせた保育者と子どものやりとりを多く必要としている。また保育者は継続的に複数の子どもを相手に対応するものであり、子ども同士のやりとりが増え、トータルで対応に時間を必要とする“じっくり型”の対応である。一方で見直したい対応としての受容・放任型は、子どもの気持ちを代弁するにとどまり、保育者の言葉かけは比較的少なくなる。また指示型は、子どもの気持ちを考えずにすぐに補助に入るもので成果を急ぐかたちになる。このように見直したい対応は、“じっくり型”とは対照的に“時短型”ともいえるものであり、子どもへの言葉かけは少なく、対応は早いものの、子ども同士のやりとりを生む余裕に欠けてしまう可能性がある。

2. 保育者の対応と諸要因との関連性について

(1) 保育経験年数と対応との関連

前掲の表3のような区分により経験年数と対応との関連を追究したところ、1～3年と3.1～6年の保育者にまた6.1～10年と10.1年～15年の保育者に類似した回答傾向がみられた。保育経験15.1年～20年と20年以上の保育者は対応傾向が異なる。よって保育経験1～3年と3.1～6年を併せて1～6年とし、6.1～10年と10.1年～15年を併せて6.1～15年とする4つに区分して対応との関連をみた。

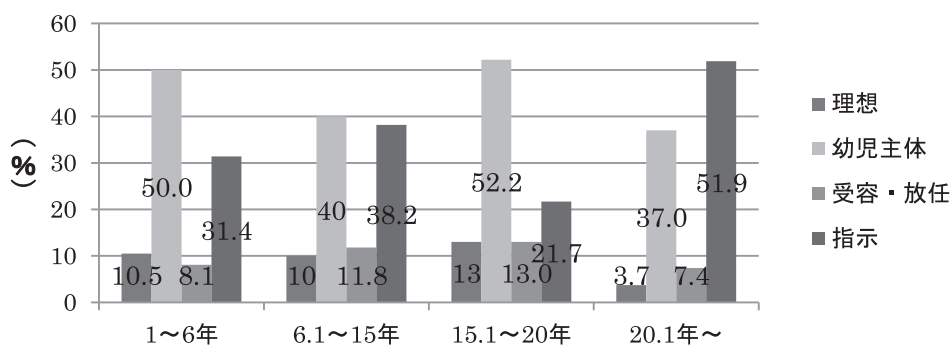


図2 保育経験年数

統計的に有意ではないが、保育経験年数1～6年と15.1年～20年の保育者が保育経験年数20.1年以上の保育者に比べ望ましい対応をしている割合が多い傾向がみられた。20.1年以上になると、受容型と理想型が減り、指示型の割合が多くなっている。新任の頃は幼児主体型だが、次第に指示型になり、10.1～20年でいったんまた幼児主体型になる。しかし、20.1年以上ではどの年数よりも指示型が増えていることがわかる。このことは、平成元年の教育要領、保育指針の改定のタイミングの影響も推測されるところである。理想型については全体的に回答者が少ないものの、園によっては多いところ

もある。また年数別に見ると理想型は15.1～20年に多い。新任と20.1年以上に理想型の回答が少ない。

(2) 保育園・幼稚園との関連

対象者数が少ないため、対応の4つの型を先にも述べたような理想型と幼児主体型を合わせた“望ましい対応”と、受容・放任型と指示型を合わせた“見直したい対応”の2つに分類して諸要因との関連をみた。

表5 鉄棒場面での対応（2分類）と保育園・幼稚園別との関連

	望ましい対応		見直したい対応	
	人数	%	人数	%
保育園	101	48.6	107	51.4
幼稚園	29	76.3	9	23.7

保育園と幼稚園の比較では、統計的に有意な差がみられ ($\chi^2=9.9348$ $df=1$ $P<0.01$)、保育園に比べ幼稚園の方が望ましい対応をしている割合が多い。(表5) この理由としては見直したい対応の指示型が幼稚園よりも保育園に多いこと、保育園の方に指示型傾向の20年以上の保育者が多いことなどが考えられる。

(3) 雇用形態との関連

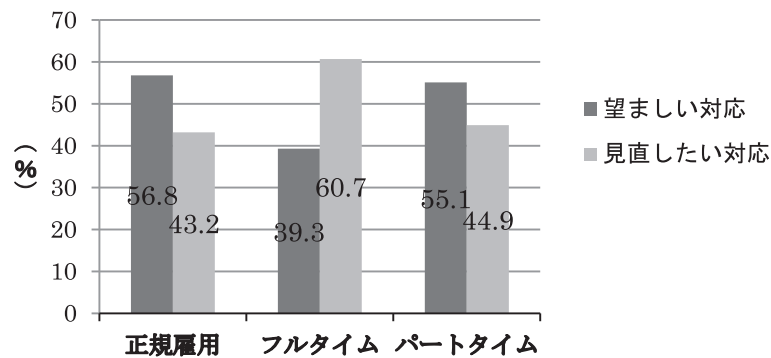


図3 雇用形態との関連

統計的に有意な差はなかったが、正規雇用に望ましい対応が多く、フルタイムとパートタイムを合わせた臨時雇用の保育者には受容・放任型か指示型の二極化がみられ、見直したい対応の割合が多い。研修を受ける機会に乏しく、時間単位での雇用であることが原因の一つであり、じっくりていねいな対応ができていないように思われる。

(4) モデルとなる保育者の数との関連

子どもへの関わりや言葉かけなどの面で園長や主任、後輩保育者などでモデルにしたい保育者がいるかという質問で複数回答を求めた。その回答に基づいてモデルとなる保育者の数の多少と対応との関連をみたのが表6である。その結果、統計的に有意な差がみられ ($\chi^2=9.5678$ $df=1$ $P<0.01$)、

上司、先輩、同僚、後輩などモデルとする保育者を多く挙げている人ほど望ましい対応をしている割合が多い。

表6 鉄棒場面での対応（2分類）とモデルとなる保育者の数との関連

	望ましい対応		見直したい対応	
	人数	%	人数	%
0～1人	79	47.3	88	52.7
2～5人	54	68.4	25	31.6

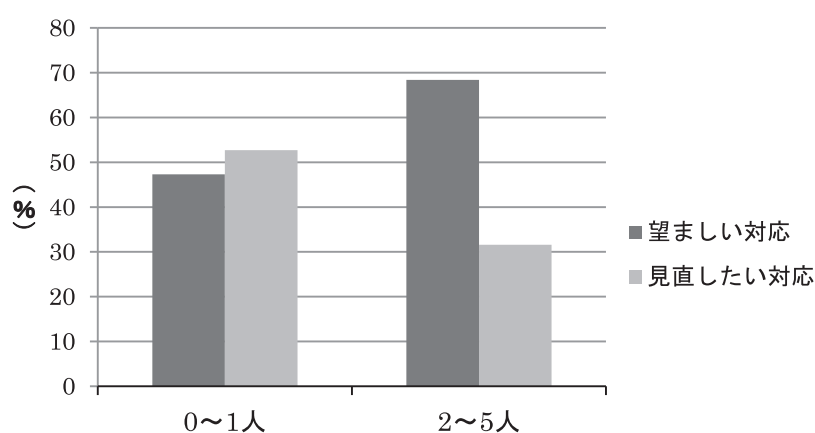


図4 モデルの数

(5) 相談相手との関連

日頃の保育で迷ったり困ったりした時に誰に相談しますかという質問で、表7のような相談相手と対応との関連をみたところ相談相手が上司と同僚については、対応にあまり違いがみられなかったが、同僚以外という回答者の身近に相談相手がいない保育者は、他より10%ほど望ましい対応が少ない。このことから、身近な相談相手の存在が必要であることがわかる。望ましい対応に結び付くような、共に保育を考え合う職場風土が大事である。また、保育は目の前で起こることについて、具体的な状況把握のもと共通理解ができる部分もあるので、同じ現場をともにする者同士がストレートな話し合いを充実させたいと考える。話し合いを充実させることのできる人間関係の構築が必要である。

表7 鉄棒場面での対応（2分類）と相談相手との関連

	望ましい対応		見直したい対応	
	人数	%	人数	%
上司	50	57.5	37	42.5
同僚	66	56.9	50	43.1
同僚以外の保育者	14	46.7	16	53.3

結 論

保育者の指導援助の在り様については、本来は実際の保育の場面で捉える必要がある。しかしこの方法では同じような場面を設定することが難しく、観察数も限定される。したがって、あくまでも仮

想的に考えるだけで実際の保育とは異なるという問題もあるが、一定の保育場面を設定して子どもへの言葉かけや対応を問うことにより、保育者の保育の本質的な部分がある程度捉えられるのではないかと考えた。取り上げた保育場面は全くの仮想というのではなく、筆者らが保育観察を行った際の実際の場面であり、観察後の検討会でも指導や援助について活発に議論されたものである。字数が限られていて十分に自分の思いを表わすのが難しいことが予想されたが、ほとんどの回答が実際に保育をしているように記述されており、信頼性や妥当性が厳密に検討されていないが、ある程度この方法の有効性が推測された。したがってこのような方法を用いて、5歳児の鉄棒場面での指導の実態を明らかにしようとした。その結果、

- ① 鉄棒などの技能の習得を必要とする場面で理想型の対応をしている保育者の割合は少ない。
- ② 望ましい対応と見直したい対応という2つに分類した対応で関連をみたところ、半数に近い保育者に見直したい対応がみられた。
- ③ 2分類の対応と諸要因との関連を追求したところ、保育経験年数では15.1年～20年の保育者に望ましい対応の回答が多く20.1年以上の保育者に見直したい対応とくに指示型の対応が多い。保育園と幼稚園では幼稚園に望ましい対応が多い。雇用形態では正規雇用が臨時雇用よりも望ましい対応が若干多い。モデルとなる保育者の数では、2人以上を回答した保育者に望ましい対応の回答が多かった。相談相手については関連がみられなかった。
- ④ 以上の結果から、鉄棒逆上がりなど技能習得を必要とするような場面での指導の見直しが求められる。そのためには、モデルになりやすい同僚先輩だけでなく園長主任を含めて園全体で課題化すること、また後輩の保育者からも学ぼうとする謙虚な姿勢をもつことが必要である。20年以上の経験をもつ保育者と臨時の雇用者は指示型の傾向にある中で、理想型の対応をする中堅の保育者の存在は大切である。理想型対応の割合は少ないが大半の園に理想型の対応をしている保育者がいることから、今後園内研修などを通して理想型的対応の共有化が望まれる。理想型の保育を一人の保育者が自分のクラスに実践するのではなく、園全体として共通理解し、保育者同士が保育について教え合い、得意な分野を頼り合える関係性を大切にする職員集団の質をあげることが保育の実践力向上につながると考える。調査後、本結果を対象保育者に伝えた。これによる自らの保育の振り返りが保育実践力向上の一助となるという検証は今後の課題である。

〈引用文献・参考文献〉

- 1) 横井志保、野田美樹、村岡眞澄 「保育者の実践的指導力の育成・向上に関する研究—遊びの後の片付けの指導—」 愛知教育大学 幼児教育研究 第14号 PP.27-34 2009
- 2) 野田美樹他 「幼児の意欲を育てる健康指導—縄遊びの場面の考察から—」 日本保育学会第63回大会 2010
- 3) 鈴木文代 「保育の質の向上に関わる実証的研究—子どもの気持ちに沿える言葉かけの意識化を図る—」 愛知教育大学幼児教育研究 第14号2009
- 4) 鈴木文代他 「保育実践力の育成・向上に関する研究—子どもへの言葉掛けの検討—」 日本保育学会第64回大会2011
- 5) 岡部翠編 「幼児のための環境教育—スウェーデンからの贈りもの『森のムッレ教室』—」 新評論 2010
- 6) 藤井ニエメラみどり・高橋睦子 「安心・平等・社会の育み フィンランドの子育てと保育」 明石書店2007
- 7) 今泉みね子・アンネッテマイザー 「森の幼稚園」 合同出版2003
- 8) 柳田信也 「幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究」 国際学院埼玉短期大学研究紀要 2008
- 9) ミネルヴァ書房編集部編 「保育所保育指針幼稚園教育要領 解説とポイント」 ミネルヴァ書房 2008
- 10) 岡本夏木 「子どもと教育 小学校になる前後 五～七歳児を育てる」 [新版] P.228 岩波書店 1995